

# 天理教 江南支部だより

発行先 江南支部  
立教189年1月1日  
発行日 九里正昭  
九里正昭  
発行責任者 甲賀町神1750番地の1  
発行住所 1月号 NO306

年頭あいさつ

支部長 九里正昭



立教百八十九年の新春を寿ぎ謹んでお慶び申しあげます。

昨年は支部活動の上にご理解。ご協力賜りまして誠にありがとうございました。

改めて昨年を振り返ってみますと、教祖百四十年祭に向かい本部よりお打ちくださいました、ようぼく一斉活動日も無事に了えることができました。

また、二〇二四年一月一日に能登半島で発生した地震における災害復興ひのきしんでは、支部から後方支援や現地に出向いてのひのきしんなど、計三回に渡り活動させて頂きました。

その他、各部会による行事等におきましても支部役員をはじめ、皆様のご協力のもと無事に了えることができましたこと、誠に有難うございました。

さて、教祖百四十年祭も一月二十六日の春季大祭に併せて本部でつとめられます。皆様におかれましても、それぞれの持ち場、立場の上から思いを胸にこの日を迎えて頂きたいと思います。

本年も様々な行事を計画しています。隨時「支部だより」や「支部情報ネット」等を活用し情報を発信していきますのでよろしくお願いします。



教祖百四十年祭

支部初にをいがけデー  
日時：1月29日 午前9時～  
拠点教会 桧龍分教会 甲南町寺庄1163番地



## 教祖は私たちの「お母さま」

ある教会を訪ねたときのこと。そこ

の奥さんが、こんな話をしてくれました。

「八十過ぎの姑おじいちゃんが床に伏せつて、だいぶ経ちます。近ごろは目に見えて弱ってきました。先日、夜中に部屋の前を通ったとき、ぼそぼそと何か言つているような声がするので、戸を開けて様子をうかがうと、『お母ちゃん、お母ちゃん』と、小さな声でつぶやいています。目には涙も浮かべています。昔から気丈で、絶対に弱みを見せない、たくましい母でしたので、その姿を見てとても驚きました』

この話を聞いて、私は「人間はみな母親から生まれ、最後にはまた、母親に戻るのだなあ」と思つたのです。

聞けば、このお姑さんは、十歳のとき実の母親と死別したそうです。その後、父親は後添いを迎えるいろいろつらいこともあつたのでしょうか。歯を食いしばり、必死で通つてこられたといいます。教会に嫁いでからは、会長

であるご主人を支えながら、にをいがけ・おたすけに奔走し、よく頑張られたそうです。

どんなに強く生きてきた人でも、人生の終わりが近づいてきたら、子供に戻つて母親を思い出す。もしかしたら、精いっぱい駆け抜けてきたからこそ、最後の最後は母親に会いたくなるのかかもしれない。そんなことを思うと、胸が熱くなりました。

つらいときや苦しいとき、母親の温もりを思い出することは、自然なことなのかもしれません。以前、ある若い女性が「帰省を終えて自宅に戻るときは、母と別れるのが寂しくて、いつも泣いてしまいます」と話していました。母

と娘の心が通い合っているからこそ、少しの間の別れでも涙が込み上げてくるのでしよう。

## 『みちのとも』より一寸い話 背中

森岡始子 神郷分教会長夫人

私たちには、それぞれ生みの親がいますが、人間の真実の親であらせられる教祖がいてくださるということも、忘れてはなりません。

私はよく「つらいこと、苦しいこと、も、親神様の思召。何ごとも心の修養

ですよ」などとお話しします。しかし、つらくてつらくて、どうしようもないときは、「お母さん、どうかたすけてください」と、教祖におすがりさせていただいても構わないと思うのです。

教祖は、お姿こそ拝することはできませんが、いまもご存命で、昼夜を分かたずお働きくださっています。おだばに帰り、教祖殿で教祖にお目にかかるさせていただけることは、私たち道の信仰者にとつて無上の喜びです。きっと教祖も、「ご苦労さん。よう帰ってきたなあ」と、温かく迎えてくさることでしょう。



教会のすぐ近くに、一人暮らしをしている80代のおじいさんがおられました。とても信仰熱心で、朝夕のおつとめや月次祭などには、必ず参拝してくださっていました。義父が会長だったころは、毎朝5時前から献饌に来られていたそうです。また、子供が大好き

で、うちの子供たちも、よくかわいがつてくださいました。

そのおじいさんが5年前、突然出直されたのです。

5年前のある日、おじいさんは愛犬と山へ散歩に出かけたまま、行方不明になりました。その日の夜、会長や警察の方が捜索しましたが見つからず、真っ暗で危険だからと、朝まで捜索が中断されました。私は居ても立つてもいられず、夜中に泣きながら会長とお願いづとめを勤めました。

次の日の早朝、息子さんが山で倒れているおじいさんを発見しました。知らせを受けてすぐに現場へ駆けつけた会長は、懸命におきづけを取り次ぎましたが、すでに体は冷たかったたとうです。救急隊員が担架で家の近くまで運んでくれたのですが、おじいさんの姿を見て私は涙が止まりませんでした。

死因は心臓発作でした。ご家族の皆さんは、「もつと早く見つけてあげられれば……。こんな寒い山の中で倒れて、つらかっただろう」と悔やんでおられました。娘さんは、「父はあれほど一

生懸命信仰していたのに、どうしてあんな最期だつたんですか」と、会長に詰め寄るほどでした。

みたまうつし、告別式が終わり、教会での合祀祭には当時3歳だった私の次男も一緒に参拝していました。そのとき次男が、「ねえ、おかあさん」と祖靈様のお社を指さしながら「おやさまと、○○さん」とおじいさんの名前を言ったのです。私が「○○さんがいるの?」と聞くと、次男は「うん」とうなずきました。

合祀祭が終わってすぐ、会長にそのことを伝えると、「きっと、教祖が迎えに来てくださったんやなあ」とつぶやき、二人で涙しました。

会長がその自らの悟りをもとに、ご家族に、「急にお父さんを亡くすことは、非常につらく悲しいことですが、

長悪いをして苦しむことなく、また、

ご家族に負担を掛けず元気なままスッと出直しさせていただいたことは、大きなご守護でもあるのですよ」とお伝えすると、皆さんも涙を流し、安心してくださいました。

この出直されたおじいさんは、本当に毎日、神様に心をつないでおられました。

ある台風の日の夜、たまたま前会長

夫妻と会長が巡教のため不在で、教会はひつそりとしていました。「こんな台風の中だから、きょうの夕づとめには誰も参拝に来られないだろうなあ」と思つていると、扉の開く音が聞こえ、いつも通りの時間におじいさんが参拝に来られたのです。夕づとめの後、心配だつたので「家までお送りしますよ」と声を掛けたのですが、「大丈夫、大丈夫。このくらい」と言つて、雨が降り強風が吹く中を歩いて帰つていかれました。おじいさんの姿が見えなくなまるまで見送つていた私は、その背中から、神様との日々の心のつなぎ方を教わつた気がしました。

「山で独り、寒いなか出直された」。これは表面だけ見ると悲しみばかりです。しかし、「病気などで長く苦しむことなく、最後に大好きな犬と大好きな地元の山で散歩しているときにスッと息を引き取られた」ことは、本当に

ご守護の出直しだと思うのです。

お道の教えを知らなければ、今回の節はご家族にとつてつらく悲しいだけですが、信仰のおかげで、つらく悲しいなかでも心の向きが変わり、また次の一步を踏み出せるのだと思います。おじいさんの息子さんは、この節を機に、毎月欠かさず車で2時間かけて教会へ参拝に来て、直接お供えを運んでくださるようになりました。

出直しは本当につらくて悲しくて、その節のさなかに心の向きを変えるのは、なかなか難しいことです。ですが、教祖の温かい親心がいっぱいこもったこの教えは、次の一步を踏み出そうとするその背中を優しくなで、そっと押してくださいます。

## 本部お節会

一月五・六・七日



# 教祖百四十年祭

立教189年  
(令和8年2026年)  
1月26日(月) 午前10時30分

心一つに、おぢばへ――

